

ニューズレター No.41

平成 16 年度 第 2 回(通算 51 回)

支部例会 開催



さる 12 月 4 日、今年度第 2 回(通算 51 回)の研究例会が高知大学教育学部において開催されました。参加者は 12 名とやや少なかったものの、大変充実した研究例会となりました。

会場校のご担当としてご尽力くださいました那須恒夫先生(高知大学教育学部)ご講演ならびに翌日の史跡見学のご案内をしてくださいました村端五郎先生(高知大学人文学部)に厚くお礼申し上げます。

プログラム

日時：平成 15 年 12 月 4 日(土)
午後 2 時～午後 5 時

場所：高知大学教育学部 1 号棟
〒780-8520 高知県高知市曙町 2-5-1
Tel: (088) 844-8368

会場受付 (13:30-)

開会行事 (14:00-14:10)
開会挨拶 支部長 小篠敏明(広島大学)

講演 (14:10-15:20)

司会・講演者紹介 竹中龍範(香川大学)

「牧野富太郎と英学 英和辞書の訳語をめぐって」 村端五郎(高知大学)

研究発表 (15:30-16:20)

司会 田中正道(広島大学)

「世良寿男の自筆ノートに見る広島高師の英語教育」 馬本 勉(広島県立大学)

研究討議 (16:20-16:50)

司会 小篠敏明(広島大学)

「中国・四国の英学(特に四国・高知の英学史)に関する話題提供」

閉会行事 (16:50-17:00)

閉会挨拶 副支部長 田中正道(広島大学)

懇親会 (18:00-) 郷土料理「彩季」にて

史跡見学

12 月 5 日(日)10:00- 高知県立牧野植物園
牧野文庫および「牧野富太郎の生涯」展示見学

参加レポート

村端先生のご講演を拝聴して

植物学と英語、これは一見何の関連性もないように見える。しかし村端氏の発表はそういった我々の先入観を覆す非常に興味深いものであった。

"Plum"の日本語訳はなんであろうか。植物学者の牧野富太郎によると、"plum"の日本語訳は「梅」ではなく、「セイヨウスモモ」であり、また「梅」の英語訳は"Japanese apricot"であるという。村端氏は植物の英語名に関する富太郎の論文に言及しつつ、植物学と英学の関連について詳細にわたる議論をおこなった。

村端氏はこれまで出版された辞書を調査した結果、この問題は1862年の『英和对訳袖珍辞書』にまでさかのぼることを示した。さらに氏は富太郎の発言を綿密に調査し、「梅」だけではなく、富太郎があらゆる植物名の適切な日本語訳について発言していたことを紹介した。



最後に村端氏は、富太郎の「植物を実体として研究する、植物と言葉の関係を徹底して追及する」姿勢に言及し、実体から言葉へ鋭く切り込んだ富太郎の手法が英学に対してもたらす可能性を主張した。

富太郎にとって植物と言語の関わりは重要なものであった。彼は「ことば(名)」と「もの(草木)」の対応関係を明確にすることを最重要課題としていた。「言語の恣意性」という概念があるが、「絶対の探求者」である富太郎にとっては愛する植物に「恣意的な」ラベルが貼られるのは我慢がならなかったのだろう。我々は「記号体系としてのことば」に気を取られがちになるが、ことばには常に「意味するもの」と「意味されるもの」の関係が存在する。我々はこの点を肝に銘じておかねばならないだろう。

私事ではあるが、評者は高知県出身であり、幼い頃から牧野富太郎の名前は知っていたし、牧野植物園にもよく足を運んでいた。富太郎は私にとって究極の「植物オタク」であり、研究のための労を厭わなかった人物として記憶していたが、その植物に対する愛情から英語への造詣も深いことが分かり、驚きを禁じ得なかった。

また今回の発表は辞書編纂において、前例主義への慎重な態度を促すものであるといえよう。辞書編纂においては記述する「実体」へと迫るべくさまざまな領域からの助力を得ることが必要となる。村端氏の発表はことばのもつ力をあらためて痛感させる示唆に富んだものであった。

(平本哲嗣・安田女子大学)

Magic! - 馬本先生の研究発表を拝聴して -

県北で発掘された数冊のノートに資料に馬本

先生が「世良壽男の自筆ノートに見る広島高師の英語教育」という研究発表をされた。これまで英学史の中で「世良壽男」という名前は聞いたこともなく、広島高師とどのように関係があるのかとても興味深く楽しみであった。

明治21年に比婆郡で生まれた「世良壽男」(せら「かずお」「としお」)は三次中学校を卒業すると明治40年に広島高等師範学校に入学した。その年の広島高師の教授陣には、杉森此馬、栗原基、小日向定次郎、菱沼平治等、また、卒業生・在校生では牧一、松田與惣之助等、英学史上活躍した方たちが多数在籍しており、思わず身乗り出してしまった。中でも栗原基の「英文学史」の「自筆ノート」には強い関心を抱いた。栗原基はラフカディオ・ハーンの東大での教え子であり、彼の講義は「八雲調の音調でユックリ講じ進められた。」という。(『小泉八雲事典』によると、栗原は自分の生徒たちに「すべての蔵書を失っても、このハーン先生のノートだけあればよい」と話していたという。)世良壽男の自筆ノートからハーンの東大講義を垣間見ることができるなんて想像もしなかった。



一方、世良が教育実習のために作成した教案からは当時(明治40年代)の英語教育、そして広島高師附属中学校における教育実践等を解明する糸口となるのではなからうか。彼は、熊本謙二郎 *New English Drill Book No.2* の Lesson XVII, (p.32-33)を教材として形容詞の比較級及び最大級の練習を目的とした教案を作成している。また、「復文練習」をさせたのではないかというご発言からこの「復文練習」について調べてみたいと思った。「ゆとり教育」のため薄くなった教科書を使用している現代こそ、こういう方法が必要ではないかと切に感じた。

およそ90年間も間に埋もれていた世良壽男の自筆ノートからさまざまな研究の糸口をご教示くださった馬本先生の Magic は本当に素晴らしく感動するとともに、私もこの Magic が使えるよう研鑽していきたいとファイトをいただき感謝しています。ありがとうございました。

(鉄森令子・ランゲージクラブ)

第 51 回研究例会史跡見学 牧野文庫英学

資料展観 に参加して



日本英学史学会広島支部が中国・四国支部と改組改称され、文字通り四国もその版図に含まれることとなって、四国における最初の例会開催がこの度の高知研究例会であった。四国での例会は2度目になるが、新組織下においては今回が最初となり、それがジョン万次郎を生んだ土佐高知における研究例会となれば舞台設定は申し分なしと言えよう。土佐は、外にも坂本竜馬率いる土佐海援隊が『和英通韻以呂波便覧』なる英語入門書を版行しており、英学史研究には絶好の環境下にあると言える。

その高知にあつて、案外知られていなかったのが植物学者・牧野富太郎の英学書コレクションである。この度の研究例会においては、初日に、この牧野文庫の調査を鋭意続けておられる高知大学の村端五郎先生のご講演をうかがい、また2日目の英学史跡見学に牧野文庫所蔵英学資料展観が充てられていた。

例会2日目は、初日の嵐のような雨空とは打って変わり、南国の初冬とはかくもあらんかと思わせる穏やかな晴天であった。この日は朝から、村端先生のご案内によって、高知市五台山に牧野植物園・牧野文庫を訪れた。5年前に新築・移転なった牧野文庫は、牧野富太郎の旧蔵書4万5千点、自筆の植物画1万点余を収蔵し、英学関係でも『英和対訳袖珍辞書』文久初版を初めとする稀覯書、貴重書が数多く蒐書されている。今回はそれらを直接閲覧することが許され、参加者一同、興奮気味に時間を過ごした。

初日夕刻には、講演・研究発表の熱気のままに忘年懇親会が持たれ、土佐の銘酒の利き酒会にな

った勢いもあって、報告子などは「今回欠席の人は一生の大損ですよ」と放言していたが、この牧野文庫見学を終えたときには、この放言は「土佐の鯨を釣り損ねたも同然ですよ」との思いに変わっていた。

(竹中龍範・香川大学)

平成 16 年度第 2 回役員会

研究例会に先立ち、今年度第2回支部役員会を開催しました(12:30~13:30)。出席者は7名でした。主な議題は次の通りです。

1. 平成 16 年度日本英学史学会全国大会報告
小篠支部長より、今年度の全国大会(10月30日~11月1日)において、支部長会議が初めて開かれたことが報告されました。
2. 中国・四国支部の活性化について
今後の活動を活性化させる方策として、各県より理事を選出し、新会員の発掘を積極的に行うことで合意を得ました。特に各地域ごとの「ご当地テーマ」に注目してみてもどうかとの意見も出されました。そのほか、広報のあり方、学会活動の一般公開をどのように進めるかなど、活発な意見交換が行われました。

中国・四国支部ニュース

『英学史論叢』第8号原稿募集

支部研究紀要『英学史論叢』第8号の刊行に向けて、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。研究論考、英学史随想、英学史時評、書評等、多数のご応募をお願いいたします。送り先は事務局まで。締切は平成17年3月22日(火)消印有効です。詳しくは以下の執筆要領をご参照下さい。なお、標準書式については、『英学史論叢』第7号p.53の図をご参照ください。

『英学史論叢』執筆要領

- ・『英学史論叢』に載録するものは研究論考およびその他のものとする。いずれも未発表のものに限る。
- ・研究論考、その他のものとも、提出されたものをそのまま複写印刷するものとする。手書き、タイプライターやワープロによる印刷など、いずれもB5判用紙を用い、上下左右に2.0~2.5cm程度の余白をとった完全原稿を提出するものとし、執筆者による校正は行わない。用紙は白紙を用いるものとし、原稿用紙等罫線のはいったものは受理しないことがある。

・研究論考は日本英学史学会広島支部研究例会、日本英学史学会本年月例会および年次大会、ならびに他支部研究例会における口頭発表をまとめたものとする。これによらない投稿論文も受理することがある。いずれも正副3通を提出し、編集委員会の査読を経て掲載の可否、書き直し等を決定するものとする。なお、編集委員会は必要に応じて編集委員以外の会員に査読を委嘱することができる。

・研究論考は参考文献・資料・図版等を含め、8ページ以内とする。

・その他のものについては、英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等とする。これについては会員の投稿および事務局・編集部の執筆依頼によるものとする。なお、新刊書評・紹介は日本英学史学会広島支部会員の著書ならびに広島支部の活動に関わる著作を取り上げるものとする。英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等、いずれも原則として2ページ以内とする。

『英学史論叢』標準書式

・『英学史論叢』投稿原稿は別に定める執筆要領に従うものとするが、さらに次の書式に従うことが望ましい。

・用紙はB5判白紙を用い、上部に25mm、下部および左右に20mm、それぞれ余白をとる。

・本文の文字の大きさは9ポイントないし10ポイントとし、1行あたり38文字、1ページ38行を標準とする。

・本文第1ページに8行分をとって論文タイトル、執筆者名を記す。論文タイトルは4倍角文字ないし18～20ポイント文字を使用し、中央に置く。執筆者名は本文と同じ大きさの文字を用いて、右に寄せて記す。なお、論文末に、右に寄せて、執筆者の所属をカッコに入れて示すこととする。

・本文中の見出しについては1行アキとし、番号を付して太字、あるいはゴチとするか、下線を施して見やすくする。

・注は脚注、尾注のいずれも可とするが、本文中に右肩数字によって注のあることを明記する。

・参考文献、引用文献は論文末に一括して示す。

会費の納入についてお願い

平成16年度分の会費を未納の方は、同封の郵便局の振込用紙にてご納入くださいますよう、よろしくお願いたします。(すでに今年度分をご納入頂いている方には同封しておりませんが、行き違いがございましたらご容赦ください。)平成17年度分の会費納入につきましては、次号にてご連絡いたします。

会員名簿の送付について

平成16年度の会員名簿(別紙)をお届けいたします。お気づきの点等ございましたら、事務局までお知らせください。

皆様の研究情報をお寄せください

会員の皆様の英学史研究に関する新刊、発表論文、講演、研究発表、市民講座、雑誌記事などの情報をお寄せください。ニュースレターでご紹介するとともに、次回以降の研究例会企画の参考にさせていただきます。

ニュースレター原稿募集!

英学史にまつわる「エッセイ」「研究メモ」「読書ノート」などの原稿をお寄せください。いずれも400～800字程度。電子メールまたはワープロで印字した原稿をお送りください。次号以降のニュースレターに掲載させていただきます。

<<広島英学史の周辺(7)>>

tsunamiの初出がハーン作品だということを昨年末の天声人語で知りました。OEDの初版には登場しませんが、Supplementの第4巻に1897年のGleanings in Buddha-Fieldsからの引用があります。"A Living God"の一節でした。このハーン作品にもとづく「稲むらの火」について、とても充実したウェブサイトが開設されています。(http://www.inamuranohi.jp/)これは必見。ニュースレター発行間際に東日本支部より紀要『東日本英学史研究』第4号をご寄贈いただきました。論文・研究報告8本、エッセイ8本ほか、興味深い論考や記事が多数掲載されています。ご希望の方には1,200円でお分けくださるとのこと。お問い合わせは事務局まで。わが中国・四国支部も紀要編集の準備を始める時期となりました。多数のご寄稿をよろしくお願いたします。黄砂も舞い、花粉症の季節となりました。春はもうすぐ。(馬)

日本英学史学会中国・四国支部ニュースレター

No.41

2005年2月24日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部

(代表 小篠敏明)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562

広島県立大学 馬本研究室内

電話&FAX: (0824) 74 - 1725 (直通)

e-mail: umamoto@bus.hiroshima-pu.ac.jp

中国・四国支部ホームページ

http://www.hiroshima-pu.ac.jp/~umamoto/eigaku/